ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　そして、テスト当日。最後のテストが終わった。

「ふぅ……」

　ぼくは息をもらし、いすのせもたれによりかかる。つくえにえんぴつを転がして、後ろを見た。

　八十人は入れそうな部屋の、一番真ん中に、ぼくはいる。そして、ぼくのれつの、一番後ろから二番目のせきに、闘悟がいたけど――いちおう、心の中では『闘悟』とよんでいるけど、まだチェックはしてもらってないので、『２５番』を『闘悟』とよぶわけにはいかない。さすがに、きそくをやぶったまま生活するどきょうは、ぼくと『２５番』にもない――闘悟もぼくと同じように、いすのせもたれに、おっかかっている。どうやらテストはうまくいったらしく、ホッとしたような顔をしていた。ここにかがみがあれば、多分、ぼくも同じ顔をしているだろう。

　テストは午前中で終わり、明日には、ごうかくかどうか分かる。

　ぼくは、最後のテストが集められる時にくばられた、紙たば――これは、レジュメというらしい――に目を落とす。外の世界の、『チーム』の名前と、そのリーダーの顔写真、そして、自分の『チーム』がどのような所なのかが書かれていた。でも相変わらず、リーダーの名前は書かれていない。

　パラパラとページをめくると、どうも『チーム』の名前と、リーダーの顔写真しかのせていないところがいくつかある。

「この人も、何も書いてないんだ……」

　ぼくをここに入れてくれた人も、その一人だった。目を閉じた、女の人の写真。最後に会ったのは、もう六年も前だ。でも、ぼくははっきりと、この人の顔をおぼえている。

　チーム名『ワルキューレ』。

　あの人がいる『チーム』は、ここだ。どんなところなのか、すごく気になる。まぁ、何を書いていても、ぼくはここに行くことに決めているけど。

　いじげん空間『トラース』がだれの物かを決めるために、『チーム』同士がたたかっているくらいのことは、ぼくも知っている。でも、ぼくが知っているのは、それだけだ。『トラース』がどんなところなのか、どうしてみんな『トラース』をほしがるのか、なんでたたかわないといけないのか、ぼくは知らない。でも、そんなこと、ぼくにはどうでもいい。ただ、あの人の役に立ちたい。それだけだ。

　ぼくがこの人の『チーム』に入りたいということを、当然、闘悟には話していないし、きまりがあるから話すことも出来ない。とは言え、ぼくはあまり、しんぱいしていない。六年間、ずっといっしょにいたのだ。きっと同じ『チーム』に入れるだろう。たとえちがう『チーム』になっても、闘悟にも闘悟の考えがあるだろうから、ぼくの考えを押しつけるつもりもない。同じことを思っているのか、ぼくがどの『チーム』に入るのかまでは、闘悟も聞いてこない。

　とりあえず、お昼を食べに、食どうに行くことにして、ぼくは立ち上がる。同時に闘悟も立ち上がった。

「でさ、算数のテストの、最初のもんだいなんだけど……」

「ああ、あれなら、おれは③にしたかな？」

「よかったー、ぼくも同じだ。あのもんだい、ちょっと自信なかったんだよね。これなら、百点取れそう」

「おれはむりかなぁ……最後のもんだい、ちょっと時間足りなかったんだよな。ほかは、もんだいないけどさ」

　そんなことを話しながら、ぼくたちはあげパンを口に運ぶ。ちょっとあまめなその味は、テストでつかれた頭にちょうど良い。テストがあった日のぼくたちは、いつもこうして、あげパンをつまみながら、答え合わせをする。

　算数のテストの話が終わると、次は国語のテストの話になる。そして、それはやがて、ほかのテストの話に変わっていった。今日はいつもみたいな小テストじゃなくて、四教科全部のテストだったから、とてもお昼ごはんの時間だけでは話し終わらない。

　それでも、部屋にもどるころには、べつのわだいに変わる。

「ねぇ『２５番』」

「どうした？」

「部屋のにもつって、どうする？」

　もし、テストにごうかくしたら、部屋のにもつはひつような物だけ残して捨てるか、もしくは持っていかないといけない。ほとんどの人は、にもつが多くて、まとめるのがめんどうだから前者をえらぶけど、ぼくはそれでも後者をえらびたかった。ここでの生活で使ったものを捨てるのは、何か悲しい。それに、歯ブラシとか時計とかベッドとかはここに元々ある物だから、ぼくの物といえば、ふくと勉強道具と、ちょっとした小物が数点だけだ。持ち出そうと思えば、持ち出せる。最悪でも、闘悟からもらった物くらいは全部持っていきたい。

だから、「二、三日分のふくと、カイザーナックルだけ持って行って、後は捨てる」と闘悟がすぐに言った時は、ショックだった。

「……捨てちゃうの？」

　思わず出たその言葉は、ちょっとふるえていた。『２５番』もそれに気がついたのか、プッとふきだして、ぼくの頭をポンポンと軽くたたく。

「……わらうなんてヒドイよ」

「わりぃわりぃ。でも、しかたねーだろ？　ぜんぶなんて持ってけっかよ……おれは、ひつようさいていげんの物だけ持ってくことにしてんだ」

「せめて、勉強道具くらい、持って行きなよ……」

「そんな顔すんなよ。勉強道具くらい、外でも手に入んだろ？」

「じゃあ、思い出の物とかは？　それとも『２５番』は、ここでの生活は楽しくなかったの？　だから、みんな捨てちゃうの？」

「楽しかったさ」

　キッパリと、闘悟はそう言う。でも、その後、ちょっと悲しそうに、首を横にふる。

「でも、ここを出てからが本番さ。『楽しかった』じゃダメなんだ。たたかうために、『トラース』ってやつを手に入れるために、捨てなきゃいけねー物もあんだよ」

「そんな……」

「わるい。だから、おれは思い出の物とかは持っていけない。持っていったら、勝ち取れねーんだ。どうしても、ここで『楽しかった』ことを思い出して、こぶしがにぶっちゃいそうなんだ。さっきも言ったように、持っていくのは、ふくとカイザーナックルだけだ」

「……ぼくが前にあげた物も、ぜんぶ捨てちゃうんだ」

「物がなくなったら、おれたちの関係は終わんのか？」

　その闘悟の言葉が、ぼくをつらぬいた気がした。

「ちげーだろ？」

「……そう、だね。ちょっとぼく、子どもっぽかったかも。ごめん、こまらせるようなこと言って。『２５番』が、ここでの生活を楽しくなかったと思っているわけ、ないよね」

「あぁ。おれだって、本当は持っていきたいんだ。でも――」

　ちょっと考えこんで闘悟は、ぼくの頭から手をはなす。どうするのかと思いきや、いきなりデコピンをかましてきた。思わず目をつぶり、のけぞってしまうぼく。

「な……何すんのさ」

　そう文句を言いながらのけぞりからかいふくしたぼくの目に、闘悟のいつものふてきなえがおが飛びこんできた。

「でも、『６８番』は、ぜんぶ持っていけよ？　大切な物、ぜんぶかかえて、それでもたたかって、勝ち取れよ。おれに出来ないこと、やってみせろ」

　多分、自分のその発言で、ぼくまで大切な物を捨ててしまうと思ったのだろう。

「……うん。分かった」

「おぅ。やくそくだからな？」

　ぼくがうなずくと、闘悟は、いっそうふてきにわらった。

　そして、この日のおふろの時間。

　この日は、テストを受けた人はじゅぎょうがなかったから、ぼくたちはいつもより早めに、おふろにはいることにした。早めに行けば、人はほとんどいないと思ったからだ。多分、今日がここで入る最後のおふろになりそうだったから、出来ればぼくたちだけで、ゆっくり入りたい。

　あんのじょう、人は少ない。

「でさ、おれ思うんだよ。『６８番』って、もっと長い木刀のほうが、たたかいやすいんじゃないかってさ」

「それを言うなら、『２５番』のカイザーナックルだって、とげがない方がいいんじゃない？」

「えぇっ？　あっちの方が、さっしょう力高いじゃん。あっちの方がいいんだよ」

「うそばっか。相手にけがさせると、ちょっとざいあくかん感じてるくせに」

「……うげ、知ってんのかよ」

「まぁ、気づいたのは最近だけどさ。『２５番』、この間いむ室送りにした子に、あやまってたでしょ？」

「げ、お前どっから見てたんだ？　人に見つからないように、さいしんの注意をはらってたんだけどな……」

「コソコソしすぎて、逆にあやしかった。『２５番』って、あんなもうしわけなさそうな顔、出来るんだね」

　そんな軽口をたたきながら、ぼくたちはわらいあう。

「六年間いっしょにいるけど、まだ分かんないことあるんだね。『２５番』のそういうところ知れて、ちょっとうれしかった」

「周りからは『にたもの同士』とか言われるけど、じっさい、ちがうところの方が多いよな」

「……うん。でも、そういう、ちがう所を知ってるのって、ぼくたちだけなんだよね。ぼくしか知らないっていうのは、なんかうれしいな」

「あー、分かるわ。ひとりじめしてるって感じだもんな――おっと、だれもいなくなったな」

　そう言われ、ぼくも周りを見わたす。気がつけば、おふろばにいるのは、ぼくたちだけになっていた。だついじょの方もちらっと見てきたけど、しばらく人が来る様子はない。

　人がいるときはしないけど、ぼくたちはこういう時、いつもやることがある。ぼくたちが先に来たのは、ゆっくりおふろに入りたいのもそうだけど、実はこれがもくてきでもある。

　ぼくは、闘悟が投げて渡してきた青いタオルに、白色のボディソープをたっぷりとつけ、ゴシゴシとあわだてる。

「いやー、入った時に人がいたから、もしかしてむりかなーなんて思ったけど、運がよかったな」

「うん、そうだね。もしかすると、今日で最後になるかもしれないし、ぼくも出来て良かったね……ほら、ぼくが先なんだから、早くいすにすわってよ。あらえないじゃん」

　まだつっ立ていた闘悟に、ぼくはほおをふくらます。ボーッとしていたら、人が来てしまうのだ。「わるいわるい」と言ってすわる闘悟のせなかに、ぼくは力いっぱいタオルをこすりつける。

「いてぇっ！　ちょっ、『６８番』、そんな強く……」

　ビクッとせなかをかがめる闘悟のはんのうがちょっと面白くて、ぼくは思わずほほえんでしまう。ニヤニヤしているぼくの目と、文句を言うためにふりかえった闘悟の目があった。

「おまっ……何ニヤついてんだよ！　ってか、何でこんなに強くこすんだっつーの！」

「はやくすわらなかったおしおき……ってところかな？」

「はぁっ？　なんだそれっ？」

「ほらほら。あらえないよ？」

　闘悟は「後でおぼえてろよ？」とこわいえがおで言うと、再びぼくにせなかをむける。さすがに今度はふつうの強さでタオルでこするけど、こうやって闘悟のせなかをあらうたびに、色の白さと、きれいさにおどろかされる。せなかだけでなく、正面も同じくらいきれいなのだ。闘悟はインファイターだから、全身がキズだらけになっていても良さそうだが、そんなことはない。まぁ、せなかがきれいなのは、闘悟が相手にせなかをむけることが、ほとんどないことも理由の一つだけど、たとえケガをしても――そんな時は、闘悟とおふろに入ることを、てきとうな理由をつけ、さけている――なおるとキズあとがあまり目立たなくなるのだ。血を見たくないぼくとしてはありがたいけど、一体どういう体になっているのか、ふしぎでならない。

　そんなことを考えながら、同時に闘悟とざつだんしている内に、ぼくは闘悟のせなかをあらい終わる。あわを流すために、シャワーを取って、ノズルをひねった。ちょっと熱めのお湯が出る。

「はい、終わったよ。次は『２５番』の番だね」

　せなかのあわを流し終わると、ぼくはそう言って、闘悟にタオルをわたす。ニヤっとわらって受け取る闘悟は、ボディソープをドバっとタオルの上にぶちまけた。青いタオルが、あっという間に白くそまる。あわ立てると、止めどなくあふれ出るあわのせいで、もはやタオルのすがたはどこにもない。とても、一人分の量とは思えない。

「うわぁ……せっけんがもったいないよ？　何に使うのさ？」

「ん？　こう使うんだ……よ！」

　大量のあわをちょっとすくうと、そうさけんで闘悟は、あろうことか、ぼくの目にそれをぶちまける。

「ふっふっふ、さっきの仕返しだ！」

「ちょっ……仕返しって、これやりすぎじゃないっ？」

　目をこすれば、中にあわが入ってくることは分かっていたけど、ぼくは思わずこすってしまった。とうぜん、目がいたい。手さぐりでシャワーつかもうとしたけど、シャワーがゆびに引っかかったしゅんかん、それをだれかに、いや見えないけど、まちがいなくゲラゲラわらっている闘悟にかすめとられる。

「め……目が、目がぁ！　はやっ……早く！　早くシャワーを！」

「ふっ、あわのいたみに、もだえ、苦しむがいい！」

「わかっ……分かったって！　さっきはゴメン！　すみませんでした！」

　そうさけぶと、ぼくの顔に、今度はシャワーがぶちまけられる。あわをあらい流される心地よさと、いきが出来ない苦しさにが、同時にぼくをおそう。

　ようやくいきが出来るようになった時には、目もあけられるようになり、ぼくはジト目で闘悟を見る。よほどぼくのはんのうがおもしろかったのか、まだおなかをかかえて、ゲラゲラとわらっていた。

「わるかったって。今度はちゃんとあらうから、ほら、せなかむけな」

　いちおう、ぼくのしせんに気づいたのか、手を合わせてペコリとあやまる闘悟だけど、わるびれてる様子はない。ゴシゴシと気持ちいい位の力かげんでおしつけられるタオルをせなかに感じながら、ぼくはちょっとほおをふくらます。まぁ、ぼくが先にやったので、これでおあいこなんだけど、それでも、ちょっとなっとくがいかない。さて、どう仕返ししてくれようか……

「おい、何ニヤけてんだ？」

　今度はぼくを、かがみごしに闘悟がジト目でにらむ。思わずぼくは、ふりかえってしまった。

「え？　ぼく、ニヤけてた？」

「自分でかがみを見てみな。すげーニヤけてっから」

　クスクスとわらう闘悟のその言葉に、ぼくは言われた通り、かがみを見る。でも、たしかにほっぺがちょっと上がってるけど、こんなの、よく見ないと分からないレベルだと思う。さっき闘悟は「すげー」と言っていたけど、そこまでじゃない。

「ふつうじゃん」

「ええー、そうか？　今は、さっきよりもニヤけてんぞ？」

　面白そうに言う闘悟だけど、どうもからかっている様子はない。どうやら、本当にニヤけているようだ。もしかして、ぼくの目がおかしいのだろうか？

　そんなことを考えているうちに、闘悟はぼくのせなかをあらい終わる。せなかにお湯がかけられ、その温かさにひたっている時、ふと横に目を向けると、まだあわだらけのタオルが、ゆかに投げられていた。そういえば、どうやって仕返しをしようか考えていた最中だった。そうだ、こうしよう。

　そう思った時、闘悟はシャワーを元にもどすために、ぼくからしせんをはずし、せなかを向ける。今がチャンスだ。ぼくはそっと、タオルについたあわを、少しだけ手にすくう。

「ん？　何してんだ？」

　シャワーを元にもどして、ぼくが何やらコソコソしていることに気がついたらしい。闘悟は、けげんな顔で、ぼくをのぞきこんだ。

「どうし――」

「てい！」

　ぼくは闘悟の口元に、今すくったあわを放りこむ。とたんに、むせかえる闘悟。ゴホゴホとせきをする度に、口からあわがこぼれおちる。そんな闘悟にわらいをこらえながら、ぼくは、さっき闘悟がかたづけたシャワーを取って、ノズルをひねる。

「へぇ、これが本当の『ひとあわふかせる』ってやつかな」

　そう言いながら、ぼくはシャワーから出るお湯を、遠くから闘悟の口にかける。あわの量は少なかったので、あっという間に、あわは流れ落ちた。

「お……おまっ……」

　シャワーを止めると、闘悟はまだむせながらも、ぼくにジリジリと近づいてくる。口元のお湯を手でぬぐうと、えがおを見せた。でも、ちょっとこわい。

「お前さっき、けっこう上手いこと言ったなって思っただろ？」

「えー……っと、まぁ、そうおも――」

　ぼくが最後まで言い終わらない内に、闘悟はおどろくほどの速さで、ぼくの後ろに回りこむ。闘悟のうでが、ぼくの首にまわされる。気がつくと、ぼくは闘悟にはがいじめにされていた。

「ぐぇ……」

「さぁ、まいったか？」

「ぎぶ……ギブギブ！」

　六年間できたえられたうでのしめつけは、ぼくが手で外せるようなレベルの強さじゃない。それでも、ぼくはジタバタと、ていこうをこころみる。とは言え、やっぱりむりだ。あえぎながら、ぼくはそうさけぶ。その時だ。

「あっ、ちょっ……バカ！」

　闘悟のその言葉が耳に入ってきたしゅんかん、ジタバタとゆかをふみつけていた、ぼくの足のうらに、何かが当たる。さっきまでふんでいたのは、かたいタイルだったはずだけど、今ふんだ物はちがう。何やらグニャっとしていた。

　それがさっきまで使っていた、あわだらけのタオルだということに気がついたのは、ぼくのしかいがクルッと上に回り始めた時だった。

「うわっ……！」

「ぎゃっ！」

　ぼくたちの、思わず出たそんな声が重なる。後ろではがいじめにしていた闘悟を巻きこんで、ぼくはしりもちをつく。ドシンというしょうげきと、おしりにかたいものがぶつかるかんかく。どうやら、闘悟を下じきにすることだけは、さけることが出来たようだ。

「いっ……」

「てぇ……」

　また、ぼくたちの声が重なる。後ろをふりかえると、闘悟も顔をしかめて、おしりのあたりをさすっている。そして、ぼくの頭の上に、何かが落ちてきた。手に取ってみると、それは、さっきふんずけたタオルで、とたんに、闘悟がプッとふきだす。つられて、ぼくもふきだしそうになる。

　ついにこらえきれなくなり、気づけばぼくたちは、転んで痛いのも忘れて、しばらくおなかをかかえ、わらいあっていた。

　次の日のお昼すぎ。ここは、昨日テストを受けた教室。ぼくと闘悟は、『合格通知』と書かれた紙を持って、教室の右側にすわって、先生からこれからの説明を聞いていた。この紙は、今日の午前中、先生からふうとうをわたされた、その中に入っていたものだ。それを見た時、ぼくたちはハイタッチでよろこびあったけど、ぼくは同時に、ついにこの時が来てしまったかとも思った。だいじょうぶだろうと思う反面、もしも闘悟と別々の『チーム』になってしまったらどうしようという、不安もある。あんなきそくさえなければ、今すぐにでも、となりの闘悟に、自分がどの『チーム』に入るつもりなのか言ってしまいそうだ。

　いや、もっと素直に、「ぼく『ワルキューレ』に入るから、闘悟も来て」と言ってしまうだろう。この日、この時間が近づくほど、その思いはつのっていく。

　でも、それは出来ない。闘悟にも闘悟の考えや、入りたい『チーム』があるはずで、友だちなら、その考えを、そんちょうすべきだと思う。

「……はぁ」

　あまりしんぱいしていなかった、あの時間がなつかしい。気づけばぼくは、今日何度目かのためいきをついていた。

「しんぱいか？」

　ためいきが聞こえたのか、闘悟がぼくに聞いてくる。小さな声で、目だけをこちらにむけているのは、今、先生が前で話しているからだろう。

「お前、もしも、おれと別の『チーム』になったらどうしようって思ってただろう？」

「よく分かったね？」

　ぼくも、顔は先生の方にむけて、小さな声で闘悟に言う。

「まぁ、ここまで来て、ためいきをついてるっつぅーことは、大体理由はそんなところだろう？」

「そこは、「友だちだからな」って言おうよ……」

「バーカ。そう言うセリフは、もっと感動的な時までとっとくもんだ……まぁ、今日、ずっとためいきをつきっぱなしだったから、もしかすると、とは思ってたけどな」

　やれやれといった口調で、闘悟は言う。そして、いっそう声を落として、闘悟はつぶやいた。

「ま、そん時はそん時だろ。なんとかなる」

「……何が？」

　ぼくも、つられて声を落とす。

「『チーム』だよ。別々の『チーム』になっても、別におれたちの友情がこわれるわけじゃねぇ」

「そりゃあそうだけど、でも、同じ『チーム』がいいじゃん」

　心の中で、ぼくはほおをふくらます。それを感じたのかいなか、闘悟の口調も、どこかこまったようなものになる。

「それにこしたことはねーけどな……多分、別々の『チーム』になっても、会う機会はあんじゃねーの？　さがせば、方法はあるはずだぜ？　最悪、こっそりうらで会うっつー手段もある」

「……そう、かなぁ？　でも――」

「では一人ずつ、第八会議室で自分の名前と、入りたい『チーム』を確認します！　右側の列

の人は、私と一緒に来なさい！」

　ぼくが次の言葉を発しようとした時、先生のそんな声が聞こえた。右側の列ということは、ぼくは行かなければならない。会話はここでちゅうだんせざるをえず、ぼくはしぶしぶと、せきを立つ。

　ろうかに出る前に、闘悟がぼくに、「しんぱいすんな」とでも言うように、真面目な顔で、コクンとうなずくのが見えた。

「しつれいします」

　ぼくはそう言って、会議室に入る。この会議室は、ここじゃ一番せまい部屋で、何とぼくたちの部屋の半分位のスペースしかない。いつもはテーブルやいすが所せましとならんで、部屋のおくに大きなホワイトボードがせんきょしているけど、今は、ホワイトボードがあった所に、小さなテーブルが一つあるだけだ。テーブルの上には、一枚の紙と、カウンセリングルームで見た物と同じパソコンが置かれていた。

それでも、せまい部屋に、せの高い黒ずくめの男が三人、テーブルの後ろ、入口側の左右の角で、立ってかこむように、ぼくをサングラスごしに見ているせいで、せま苦しいことには変わりない。部屋のまんなかまで進んだ時、男のこしに銀色に光る物が目に飛びこんできた。最初、ぼくはそれをナイフだと思ったけど、ちがうことに気がつく。本でしか見たことがないけど、あれはたしか、『じゅう』という武器だ。ふと、こわくなって、ここから逃げ出したくなるしょうどうにかられる。

何とかそれをこらえて、ぼくはテーブルの前まで来た。三人の中でも、ひときわ大きな男が、ぼくを見つめる。二メートルはあろうかという、その男から見下ろされると、思わずいしゅくしてしまいそうだ。

男は、テーブルの上にある紙を、コンコンとたたく。

「研修番号『２４９９６８番』。この紙に、自分の名前と、入りたい『チーム』を書きなさい」

　野太い声でそう言われ、ぼくはふるえる手で、紙といっしょに置かれていた、まっ黒いペンを手に取る。ひとこきゅう置いて、ぼくは紙に、『ロラン』『ワルキューレ』と書いた。

　男はぼくが書いたそれをジッと見つめ、パソコンに何かを打ちこむ。太い指から、パソコンのキーボードをたたく音がなめらかに聞こえてきて、それがなんだか面白い。

「よろしい。では、今から君の名前は『ロラン』だ」

　あっさりとそう言われ、ぼくは思わず目をパチクリとさせる。ちょっと、ひょうしぬけしてしまった。もっとかくにんに時間がかかると思っていたし、最悪、名前は「考え直せ」と言われるかもしれないと、不安でしょうがなかったけど……どうやら、むようなしんぱいだったみたいだ。これなら、多分『闘悟』もだいじょうぶだろう。あっちの方が、何か名前っぽいし。

「では、この教室に行きなさい。そこで、『ワルキューレ』のリーダーが来るのを待つこと」

　そう言って男は、ぼくに小さな紙切れをわたす。そこには、地図が書かれていたけど、行ったことのない場所だった。さいわい、地図によると、図書室のあたりにある道を、まっすぐに行けばいいっぽい。これなら、まよわずにすみそうだ。

「何をしている。早く行きなさい」

　ボーッと地図を見ていたせいで、男がきびしい口調で、ぼくをしかりつける。いっしゅんビクッとなって、ぼくは頭を下げて、足早に部屋を出た。

　部屋を出ると、何だかろうかが広く感じられ、ぼくは地図に書かれている場所にむかおうとする。心なしか、足も軽い。でも、それでもまだ、むねの中のモヤモヤとしたものは消えない。

「……あっ！」

　そう言えば、カウンセリングルームの先生に、今までのお礼を言うのをわすれていた。ここを出る前に、一言あいさつをしようと、ぼくは行き先をへんこうする。

　だいじょうぶ。きっと、同じ『チーム』に入れる。だって、友だちだもん。

「……そうか。ついに、ここを出るんだね。まあ、分かっていたことだけど……」

　ここはカウンセリングルーム。ぼくがここを出ることが決まったことを伝えると、先生は、どこかうれしそうな、さみしそうな顔を見せる。

「先生、今まで、ありがとうございました」

　ぼくは頭を下げる。まだ病気はなおってないけど、それでも、ここで一番お世話になった先生は、まちがいなくこの人で、ぼくの口から、しぜんとそういう言葉が出る。

「いやいや、君が頑張ったからだよ……なるほど、それで今日は、お昼休みになっても、ここに来なかったんだね？　どうお仕置きしようか考えていたんだが……なるほどなるほど。それならしょうがないか。楽しみが一つ減ってしまった」

　茶化すような声で、先生はそう言う。じょうだんだと分かっているけど、それでも、ちょっとせなかがゾクッとなって、自分でも顔が引きつるのが分かった。一応、聞いてみる。

「た……楽しみだったんですか？」

　それを聞いたしゅんかん、先生はクスッとわらいだす。それを見て、ぼくのせなかが、スっと楽になるのを感じた。

「冗談だよ」

「よ……良かった」

　ホッと息をつく。ポンっと、先生の右手が、ぼくの頭に置かれる。

「卒業おめでとう、『６８番』君……いや、そういえば、もう名前があるんだよね？　どんな名前にしたんだい？」

「あれ、先生には言ってもいいんですか？」

「もちろんだよ。規則に、言っちゃいけないなんてこと、書かれていなかただろう？」

　頭の上には先生の手が乗っているので、ぼくは心の中で、首をかしげる。たしかにきそくに、先生にも教えてはいけない、とは書かれていなかったけど、それでも先生はだれも、自分の事を話さない。だから、書かれてはいなくても、先生にも話しちゃいけないものだと、ぼくはずっと思っていた。

　ぼくはコホンとせきばらいをする。何だか、闘悟いがいの人に言うのが、ちょっとはずかしい。これが名前ってやつか。

「ぼくの名前は、『ロラン』です。『６８番』で『ロラン』」

「『ロラン』……か。なるほど、いい名前だね」

　先生は、ニッコリとほほえむ。そして、先生もぼくみたいに、コホンとせきばらいをした。

「私の名前は『』っていいます。友達の友に、美しいって書くんだよ」

「へぇ……漢字なんですか？」

「日本じゃ、こっちが普通かな？　でも、『ロラン』も十分いい名前だと思うよ」

　そう言って、先生はクシャっと、ぼくの頭をなでる。漢字がふつうなら、『闘悟』の名前は、まちがいなく通ると、ぼくは思う。これで、不安材料は一つなくなった。

「あっ！」

　先生はぼくの頭に乗せている手をはなし、思い出したように、パチンと指をならす。

「そうだ。最後に一回、カウンセリング受けてみる？」

「いえ、けっこうです」

　ぼくはえがおでそう言って、部屋を出た。

「……ここ、かな？」

　カウンセリングルームを出たぼくは、地図で指定された所まで、寄り道せずにむかった。多分ここだろうという所に来ると、そこにはプレハブの小さな建物が建っていた。こんな場所、あったっけ？

　ぼくはしばらく、白い建物を見つめる。周りが木や池でかこまれている中、この建物は、何だかミスマッチだ。見た感じ、わりと新しい。多分、建てられてから、そんなに時間は経ってないだろう。もしかして、今日のために、わざわざ準備したのだろうか？

　そんなことを考えるぼくだけど、こうしていても始まらない。とりあえず、中に入ってみるために、ドアノブを回して、引っぱる。意外と重いドアは、ギギギという音を立てて、開いた。どうやら、新しいのは見た目だけらしい。

「……うわぁ」

　中に入って、ぼくは思わずそうつぶやいた。きたない。とにかく散らかっていて、ほこりまみれだ。そのせいか、空気が重い。息がつまりそうで、ぼくはゲホゲホとせきこむ。

しかいが悪い中、ぼくは周りを見わたす。ほかに人がいないところをみると、どうやら、ぼくが一番乗りらしい。

「……なんかないかな？」

　なら、ここの部屋をきれいにしておこうと、ぼくはそうじ道具をさがす。でも、ぼくたちがいつも使っている教室よりも広いくせに、物がつくえや、白いコンクリートのゆかに散乱しているせいで、そうじ道具どころか、何がどこにあるか、かえって全然分からない。

　さすがに、ちょっとおかしいだろう。こんな所を、だれかとの待ち合わせ場所に指定するはずがない。

「場所、まちがえたかな……？」

　ふと、そう思ったぼくは、もう一度場所をかくにんするために、さっきもらった紙を取り出す。そして、そこに書かれていることが――

いや、そこに書かれている文字が、目にうつる。

　『死ね』

「……？」

いっしゅん、そこに書かれている文字を、ぼくは正しく読むことが出来なかった。これは、さっきもらった紙で、まちがいない。うらを見るけど、そこには何も書かれていなかった。これは一体、どういうことだろう？　そんなことを思ったぼくのしかいのはしっこに、白い物がうつる。

「……！」

　目を上げ、そこにいる人をにんしきする。いや、そこに『いる』『人』ではなく、そこに『ある』『物』というのが、正しいだろう。さっきドアを開けた時とはちがう、ギギギという音が、ぼくの耳にとどいた。古いきかいが動くような、不気味な音。ぼくのこきゅうがこおる。絵やしゃしんでしか見たことのない物が、ぼくの目に飛びこんでくる。

　そこにあったのは、さっきの男たちと同じくらいの大きさの、まっ黒い、二体の人がたのロボットだった。

　もし、この部屋に入った時に、このロボットがあったら、ぼくが感じることは、今とはまったくちがうものだっただろう。好奇心から手でベタベタと、さわってみたかもしれない。今ぼくをにらんでいる――ロボットには、そんなつもりはないのだろうが――この四つの、どうたいの上にチョンと乗っている、まるで目のような赤い玉から発する光に、足がすくむこともなかったはずだ。たとえ、それが上半身がアンバランスにふくらんでいてるとしても、たとえロボットのうでに、細長い、四十センチほどのナイフが取り付けられていたとしても。

　でも、ぼくが部屋に入った時、このロボットは、まちがいなく、ここにはなかった。あったとしても、ここまで、ぼくに近いところにはなかった。ましてや、うでをふり上げてもいなかったはずだ。

　ここで、むいしきとはいえ、ぼくが一歩後ろに後ずされたのは、きせきと言っていい。

　二体同時にふりおろしたナイフは、後ずさる前までぼくがいた、その場所の、白いコンクリートに深くつきささっていた。ナイフの刃が、半分くらいまでかくれている。おそまきながら、ぼくの顔から、サーっと血の気が引く。

「なん……で……」

　思わず、そんな声が出たのが分かった。二体のロボットが、ナイフをゆかから引っこぬき、そのまま同時に、再びうでをふり上げる。

　でも、ぼくは六年間、だてに体育のじゅぎょうで、たたかってきたわけじゃない。

　一度見てしまえば、ロボットの動きは単調なことに気がついたぼくは、タイミングを見計らって、右に飛ぶ。体はガチガチで、思うように動かない。それでも、これくらいは出来る。

　思いっきり飛んだせいで、頭からつっこむ。飛びこんだ先は、ダンボールや何かのケース、そして、ある物が数本入ったカゴがつまれたところだった。山積みのダンボールが、上から、うつぶせになっているぼくの所になだれこむ。中身が入ってなくて良かったけど、ダンボールの角やへりが当たったせいで、体中がいたい。長そで、長ズボンで良かった。これが生うで、生足のままだったら、ケガをしていただろう。

　ダンボールにうもれながらも、ロボットの足音がゆっくりと、ぼくに近づいて来ているのが分かる。ぼくは手さぐりで、でも急いで、ある物をさがす。

「……あった！」

　つかみなれた、あのかたい、それでいて、ぼくの手の平にしっとりとくるかんしょく。それをつかんだぼくは、いきおいよく、それを引きぬく。

　そして同時に、体にのしかかっている、いくつものダンボールを、うでのひとふりで、はね飛ばした。手と足にむりやり力を入れて、立ち上がる。そして木刀を、かたより上に、りょう手で持って、かまえる。

「……ロラン。いざ、まいります！」

　まだ上手く動かない体にかつを入れるように、ぼくはそうさけんだ。

もちろん、ぼくが何をさけぼうと、ロボットは動じない。むきしつな赤い光で、ぼくをみつめるだけだ。ゾクッとする。後ろはかべ。ロボットがこちらにむかってくる度に、ギギギという音が、ふかいなほど、ぼくの耳に飛びこんでくる。

　にげることも、最初は考えた。

　でも、これから『トラース』を手に入れるためにたたかうなら、それじゃだめだ。あの人の役に立ちたいなら、ここでたたかわないといけない。そう思った。

　だからぼくは、かまえた木刀の刃先を、地面スレスレまで下げる。三度うでをふり上げた、ぼくから見て右側のロボットのふところに、うでがふりおろされるより早く、飛びこんだ。ガラ空きのどうたいに、思いっきり木刀で切りつける。

「いっ……」

　ガンっという音がひびく。

「たい……」

　そして、同時に、ぼくの手に、ふかいなしんどうが走ってきた。

どうやら、このロボットの体は、何かかたい物で出来ているらしい。木刀で切りつけた所は、きず一つついていなかった。

でも、ぼくがそれを分かった時には、ふりおろされたナイフが、ぼくのほっぺをかすっていた。そして、左にいたロボットが、後退したぼくに切りかかる。

水平にふられたうでについていたナイフは、ぼくには当たらない。当たったのは、ナイフではなく、うでだ。ラリアット。昔、闘悟にやられたことがある。

うでのいちげきは、ぼくを、まるでタンポポのわた毛のように、いともかんたんに、ふっとばす。気が付くと、ぼくはさっき飛びこんだダンボールの山に、頭から、あおむけにつっこんでいた。これがたたかい……じゅぎょうでやったやつとはちがう。死のきょうふが、ぼくにおそいかかってくる。さかさまになるしかい。こしのあたりにあるダンボールが、ぼくをえびぞりにさせていた。頭をゆかに打ち付けたせいで、ズキズキする。息が苦しい。

「まだ……だ……」

　そうつぶやいて、立ち上がろうとした、その時だ。ぼくは、見てしまった。

「あぁ……」

　弱々しい声が、ぼくの口からこぼれる。スっと、右のじょうわんにいたみが走った。いや、「いたみ」というレベルじゃない。さっきのナイフは、ぼくのほっぺをかすっただけじゃなかった。何かが流れ出るかんかく。それは、ぼくのかたを流れ、首を伝って、顔のあたりにまで広がってくる。

　赤いえき体。

　本来なら、えき体は、うでを伝ってゆかに落ちる。それなら見なければいいだけだ。でも、今のぼくは、頭が下に、体が上にきている。

「……うわぁ」

　そいつは、ついにぼくの目に入ってきた。ささるようないたみ。焼け付くように熱くなる目。右目の世界が、まっ赤にそまる。その時だった。

「……あれ？」

　しんぞうが、ぼくのむねを、内側から破って出てきそうなことに変わりはない。息がはげしくなって、自分でもせいぎょ出来ないことも。

でも、いつもとはちがう。ぼくは、自分が思ったよりもれいせいであることに気がついた。もしやと思って、自分の右手で、顔に流れる赤いえき体をなぞる。そして、指についたそのえき体を――意を決して、左目にたらした。

いたみに、思わずりょう目をギュッととじる。でも、それにあらがって、ぼくはゆっくりと、目を開けた。

世界が、赤い。ぼくは、今度こそ立ち上がる。手をはなれた木刀は、近くに落ちていた。それを左手で拾い上げ、ぼくは、すぐ近くにまでせまっている、二体のロボットをにらむ。そして次に、ぼくは、ゆかに、そして自分の体に流れている、にくたらしい赤いあのえき体を見た。あんなにこわかったのに、気分が悪くなることもさけられなかったのに、どうしようもなかったのに、今は平気だ。

　『カラーセラピー』

　ふと、ぼくは少し前の『ほけん体育』のじゅぎょうで出てきた、この言葉を思い出す。色が持つ力を、病気をなおすことに使う。そんなやつだ。

　青い色は、気持ちをしずめ、

　緑の色は、安心をあたえ、

　黄色は、やる気やテンションを上げる。

　では、赤い色は、どんな効果を持つのかだろう？

　答えは、今、自分自身が体験している。

「……ふぅ」

　再びロボットをにらむぼく。しんぞうが、ドクンと大きな音を立てた。カッと目を見開くのが分かる。こきゅうがあらいけど、それでも、そのあらさが心地いい。そして、ぜんぶ赤い。黒いロボットも、茶色い木刀も、白いゆかも。それでも、相手が何をするのか、さっきよりもはっきりと分かった。そして、その動きも、まるでスローもションで再生されているかのように、イライラするほどにゆっくりだ。

　二体のロボットはうでをふりあげる。またそれか。いいかげん、もうあきた。まずは、左側のやつだ。

　そいつにゆっくりと近づいたぼくは、ふりおろされるうでに対して、左に一歩だけ動いて、そこで立ち止まる。ナイフが、さっきのきず口をかすめる。ようやく落ち着いてきた右うでが、再び熱くなる。でも、そんなのどうでも良かった。ナイフが、ゆかにつきささる。

　どうたいに切りつけても、むだだろう。多分、さっきみたいに、

　人がたロボットなので、たとえ細かい体の作りがちがっていても、基本的な動作は同じだ。こうげきするために、足をふみこんで、うでを上から下におろせば、人間で言うところの『首』の位置は下がる。

　こいつには『首』はないけど、代わりに、むき出しになっている目があった。当然、ぼくの顔のあたりまで下がっている。赤い目も、しかいが赤いせいで、今はただピカピカと点めつしているだけにすぎない。さっきまで、きょうふを感じていたはずだけど、今はただただ――

「うっとうしいんだよ」

　そうつぶやくが早いか、ぼくは左手ににぎられた木刀を、その目に後ろから切りつける。バキッという音とともに、木刀と、その赤い目がくだけた。どうやら、思ったよりも、この目もかたかったらしい。

「まぁ……いいか」

　木刀なら、後ろに代わりがいっぱいある。さすがに武器がなければどうしようもない。木刀を取りに行くために、今まさに、うでをふりおろそうとしている右側のロボットをむしして、ぼくはふりかえった。

　その時、いやな音が聞こえた。今まで聞いたことのない、何かがスムーズに開く音。

　思わずふりかえったその先。体がかたまる。さっき目をくだいたロボットが、どうたいを開いていた。どうたいの中に、何か入っている。あれも、しゃしんや絵でしか見たことがないものだ。たしか、あれは――ミサイル……だっけ？

「何で……まだ動けるのか？」

　思わず、そんな声が口からこぼれる。人間は、首から上がなくなれば死ぬ。だから、こいつもそうだと思っていたけど……どうやら、ちがったらしい。

　ミサイルは、わずか、ぼくのにぎりこぶしほどの大きさしかないけど、見えるはんいでは、ぜんぶで十六発もあった。まだぶじな方のロボットは、部屋のおくに、早々にさがっている。ミサイルに対するちしきは、あまりないけど、それでも、あれが自分にむけてはなたれることは、かんたんに予測できた。ゾッと、せすじがこおる。

　打ち落とすしか、ない。

　とっさに、そうはんだんするけど、ぼくの体は動かない。何とか動く口を、けんめいに開く。

「……動け、動けよ！」

　ぼくがそうさけび、体のこうちょくが解け、けたたましい音がひびくのと、すべて同時だった。ぼくは、目を閉じかけた。

　閉じかけた、というのは、言葉の通りだ。閉じる、その寸前までいった。つまり、まだ閉じていない。

　ぼくが目を閉じなかったのは、けたたましい音の正体が、ミサイルがはなたれた時の音ではないことに、気がついたからだ。さっきとは別の意味で、せすじがこおりつく。

　ぼくのしかいに、まず最初に飛びこんできたのは、空中でクルクルと回りながら飛んでいく、この建物のドアだった。多分、さっきの音の正体はこれだろう。とはいえ、そんなことはどうでもいい。もんだいは、次に飛びきた物だ。ぼくは、いっしゅん、そのこうけいを信じることが出来なかった。

　車いすが、空を飛んでいる。

　文字通りだ。車いすが、ロボットの頭上を飛びこえて、ゆかのほこりを、せいだいにまきちらし、何かがはじけるような音を立てて着地した。まい上がるほこりの中、よく見れば人がすわっている。こちらに車いすのせもたれをむけているせいで、顔は分からない。

「！」

「お姉様！」

　続いて、男女の声が聞こえる。だれだろう？

「ふ……ふぅ。間に合ったかしら……？」

　そして、車いすにすわっている人が、そうつぶやいた。女の人の声だ。それを聞いたしゅんかん、こおっていたぼくのせすじに、電流が走る。

　ぼくは、この人を知っている。

　ずいぶん昔に、ぼくは同じ声を聞いた。ここに来る前、ゆいいつ、きおくに残っている、あの声。

「縁！　いたましたよ！　まだ生きています！」

　入ってきた女の人が、ぼくを見つけて、大声でさけぶ。

「そう……良かった」

　車いすの女の人は、どうやら「ゆかり」さん、というらしい。ゆかりさんは、それを聞いて、ホッと息をはいた。

「全く……お姉様。無茶しすぎです！　怪我でもされたら、どうするんですかっ？」

　女の人に続いて入ってきた男の人が、ロボットをむしして、ゆかりさんに近づく。でも、あの人は、ゆかりさんのことを、「おねえさま」とよんでいて、ぼくはわけが分からない。どっちが、本当の名前なんだろう？　「ゆかり」さんの方が、名前っぽいけど……「おねえさま」の方が、ひびきがいいようにも感じる……

　ぼうぜんと立ちつくすぼくの所に、さっきの男の人と、ゆかりさんがやってくる。しかいが赤いせいで、色をにんしきすることは出来ない。でも、ぼくはつい最近、この人をしゃしんで見た。

　この人は、昔、ぼくをここに入れてくれた人。そして『ワルキューレ』のリーダーだ。

「さぁ。この子です」

　男の人が、そう言う。相変わらず、色は分からない。分かるのは、この人が、メガネをかけていること、かみをオールバックにかためていること、そして、会議室にいた男の人と大差ないくらい、せが高いことくらいだ。

　その人にそう言われ、ゆかりさんは、ぼくにペコリと頭を下げる。

「初めまして。『ワルキューレ』のリーダー、縁です」

　ゆかりさんは、おっとりとした、ものごていねいな口調でそう言うと、顔を上げる。ここでぼくは初めて、この人の、役に立ちたいと思っていた人の、名前を知った。

　こしのあたりまでのびた、長いかみ。色は、今は分からないけど、しゃしんでは黒かったから、今もきっと黒いはずだ。うでには、かなり長い物が二本、かかえられていて、ぼくの目をくぎづけにする。それは、刀だった。二本とも、ぼくのせたけの倍はありそうな長さだ。

　赤い色しかない中で、それは、ひときわ目立っていた。なぜなら、その二本の刀は、赤くなかったから。白いゆかも、黒いかみも、赤くそまっている世界の中にうつっているにもかかわらず。

　一本は、とにかく白い。赤い世界を、切りさいてしまうかのように、白かった。

　一本は、とにかく黒い。赤い世界を、かき消してしまうかのように、黒かった。

　正反対の色だけど、それは、ぼくの目を焼いてしまうかのごとく、それぞれことなる形で光かがやいている。そのかがやきに、ぼくは思わず目を閉じた。

「さて……いっぱいお話したいことがあるけど、まずは謝らせて下さい」

　ゆかりさんのその声が聞こえ、ぼくは目を開ける。ゆかりさんは、再び頭を下げていた。

「私達のせいで、あなたを危険にさらしてしまいました。早く助けに来ることが出来なくて、本当に……ごめんなさい。でも、それでも――」

　おっとりとした声が、どこかしずんだような色をふくむ。ぼくは、何も言えなかった。何を言えばいいか、分からなかった。

　そんな中、今までずっとだまっていたロボットが動き出す。どうたいを開いたままのロボットが、ギュィィンという音を立てた。

「絵里、あなたは、他の子の様子を見てきてください」

　ゆかりさんの口調が、急にきびしいものに変わる。

「分かりました！」

　今まで、入口の所に立っていた女の人が、右手をおでこのところまで上げて、けいれいをすると、きびすを返して外に出る。

　そして、ゆかりさんは、今度は男の人の方に顔をむける。どうやら、目が見えてなくても、近くにだれがいるのかは、けはいで分かるみたいだ。

「木藤さん！」

「はい、お姉様！」

　どうやら『きとうさん』というらしい男の人は、ゆかりさんの体を、車いすごとロボットの方に、百八十度回転させる。ゆかりさんのふんいきが、スっと変わる。それと、ロボットの体から、十六発のミサイルがはなたれるのは、ほぼ同時だった。

　そして、次に見たこうけいを、ぼくは一生わすれないだろう。

　黒いざんぞうが、たえまなく空中を走る。同時に、ゆかりさんの細い右うでも、目にも止まらぬスピードで動いている。ミサイルは、ナイフがふりおろされる時の速度ほどではないものの、それでも十分速い。でもそのミサイルは、黒いざんぞうにふれたしゅんかん、空中で小さくばくはつする。

　その事実が、ゆかりさんが、さっきの黒刀をふりまわしていることによって作られたものだと分かるのに、ぼくはしばらく時間がかかった。

「たたき落としている……？　目が見えないのに……？」

　そうつぶやくぼくの顔は、さぞかしマヌケなものだっただろう。それほどに、ぼくは見とれていた。美しい。ゆかりさんのそのすがたが、ただただ美しかった。ゆれるかみの毛、せまる気はく。そして、今はざんぞうと化してる、黒い刀身。どれか一つでも欠けると、この美しさは、あっという間になくなってしまいそうだ。

　やがて、十六発のミサイルを全てたたき落とすと、ゆかりさんは、ゆっくりと、どうたいが空っぽになったロボットに近づいていく。目を失い、体も空っぽ。それでもまだ動けるのか、ロボットは、ゆかりさんに、うでをふりかざす。

　だけど、それがふりおろされるより早く、黒刀がそのうでを、へしおった。続いて、上げてない方のうでも、バキッという音とともに、ふっとぶ。この短い間に、どうやら二回切りつけたみたいだけど、ぼくには全く見えなかった。

　ロボットがバッタリとたおれた時、ゆかりさんは、ぼくの方にふりかえる。

「こんな……こんな私でよければ、一緒に戦ってくれますか？」

　落ち着いた、それでいてゆったりとした口調がもどってきて、ふしぎな安心感を、ぼくはおぼえた。この人といっしょなら、絶対だいじょうぶだと、そう思う。

「もちろんです」

　だから、気がつくと、そう答えていた。

「そう……ありがとう！」

　ゆかりさんはニッコリとぼくにわらいかけると、ひざの上に乗っていた、白い刀を、ぼくに差し出す。刃に手がふれないよう、ふるえる手でそれをつかむと、ゆかりさんは、そっと手をはなした。とたんに、その重さが、手にかかる。りょう手で持たないと、とてもじゃないけど、ささえきれない。ずっしりとしたそのかんしょく、手ににじむ素材の感じ、全てが木刀のものとはちがう。切りさくような、その白さに、しぜんと、ぼくの心も引きしまる。刀は、ぼくのせたけの倍はゆうにありそうな長さで、ふりまわせるか、正直しんぱいだ。それでも、ぼくはそれをかまえた。かたより上に上げるのはむりだから、こしを低くし、刃先を地面スレスレまで落とす。

　最後に残ったロボットは、さっきのやつみたいに、どうたいを開く。再び、あの十六発のミサイルが飛んでくるのだろう。そう思うと、ちょっとこわい。

「大丈夫。私が必ず守ります。なにがあっても、指一本触れさせません」

　ぼくの心を見すかしたかのような、ゆかりさんの言葉。それを聞いたしゅんかん、ぼくの中にあったきょうふ心が、少しずつうすれていく。

「いきますよ！」

「はい！」

　ゆかりさんの言葉を信じて、ぼくはロボットの方へ走った。重い刀を持っている上に、ロボットとの間には、わりと距離がある。ロボットがぼくをげいげきする時間は、十分にある。

　事実、距離を半分もつめない内に、ミサイルがはなたれた。自分の体から少しはなれた所で、ばくはつ音がする。ときおり、黒いざんぞうが、ぼくのしかいのはしにうつる。でも、ぼくは気にしない。ただまっすぐ、ぼくはつき進む。

「うぉぉぉ！」

　そして、ロボットとの距離を十分につめた時、ぼくはおたけびをあげ、白い刀身を思いっきり、ロボットのどうたいに水平に切りつける。そのしゅんかん、ぼくはさっきと同じミスをしてしまったと思った。あのかたい体に、はじかれる……！

　でも、そう思ったのは、白いざんげきが、ロボットのどうたいを、すでにまっ二つに切りさいた後だった。何のていこうもなく、まるで、ほうちょうで豆腐を切る時と同じようななめらかさで、切ったぼくですら、切ったことに気がつかなかった。

　切ったロボットの上半身が、ぼくの後ろに、大きな音を立てて落ちる。

「これ……は……？」

　とても、今体験したことが信じられず、ぼくは刀を見る。まばゆいほど白いその刀の、刀身にうかび上がっている言葉を、ぼくは読み上げる。

「『　』」

　色が戻ってきたぼくの世界に、今、見たこともないようなけしきが広がっていた。

　次から次へと、高速でぼくの後ろへと消えていく、窓の外のけしき。これが、外の世界。まだ空は明るいから、よく見える。ぼくが今乗っているこれは、『車』というらしい。にたようなものを、しゃしんで見た。

「あのっ、あれはなんですかっ？」

「あれは、『コンビニ』っていうんだよ」

「じゃあっ、あれはっ？」

「あれは、『喫茶店』。コーヒーとか、軽い食事をするところだね」

「あれはっ？」

　ぼくは、こうふんしていた。さっきまで死ぬかもしれないたたかいをしていたのが、まるでうそのようだ。気がつけば、ぼくは鼻の頭を、窓に押し付けていた。

「ふふふ……よっぽど、うれしいのね、あなた」

　車を運転している、スーツを着た女の人が、クスクスとわらいながら、そう言った。この人は、ほかの子の様子を見に行った人だ。

「くわしい話は、他の子達も集めて、また後日にしましょうか」

　女の人のとなりで、男の人がそう言った。この人は、たしか『きとう』さんだったかな？　車いすを押していた、あの人だ。

「そうね。この子達も疲れたでしょうし……でも、改めて自己紹介はしておきましょう」

　そして、ぼくのとなりで、ゆかりさんがそう言う。先ほどまで手にかかえられていた刀は、今、二本とも、ぼくの手元にあった。

「あの、その前に……これ、本当にいいんですか？」

　ぼくは、その二本の刀を見つめ、そう言った。これは、あのたたかいの後、ゆかりさんがぼくにくれたものだ。

「いいんですよ。それは、あなたの方が、上手く使えるわ」

　ゆかりさんはそう言うけど、黒い刀は、白い刀よりもさらに重く、正直、ぼくには持つだけでせいいっぱいだった。こんなものを、ゆかりさんのように、かた手で、しかもあんなに素早くふりまわせる自信はない。あらためて、この人のすごさを知ったしゅんかんだった。

　ちなみに黒い刀は、『　』という名前だ。

　かがみごしに、きとうさんがみけんに、いっしゅん、しわをよせるのを見た。でも、その意味を知る前に、ゆかりさんが、ちょっときびしい顔で、口を開く。

「その代わり、大切に使ってくださいね？　その刀は、決して人を傷つけるための物ではありません……くれぐれも、仲間に、友達に向かって振らないこと。約束、出来ますか？」

「……はい」

　ぼくは、うなずいた。その返事を聞いて、ゆかりさんの顔が、やわらかいものへともどる。目は閉じていても、そのゆかりさんの表情は、どこかぼくを落ち着かせた。不思議な人だ。

　再び、ゆかりさんが口を開く。

「じゃあ、自己紹介に戻りましょう。まずは、あなたの名前を教えてくれますか？」

「えっと……ぼくは、『ロラン』っていいます」

　ほかの人に名前を教えるのは、これで二回目だ。自分の名前を言うのは、中々にきんちょうする。ぼくの声は、ちょっと上ずっていた。

「お姉様の側近の、木藤といいます。『木』は植物の『木』、『藤』も植物の『藤』、あるいは、『藤色』の『藤』と書きます」

　真面目な顔を取りもどして、木藤さんは、ぼくにペコリとえしゃくをする。となりで、女の人が、手を上げる。

「同じく側近の、っていいます。字は、『豊かに栄える絵の里』ですかね？」

　思わず、絵里さんいがいのみんなが、プッとふきだしてしまう。

「絵里、それじゃ分かりづらいわよ？」

「……そうですかね？」

　首をかしげる絵里さん。なんだか、ほほえましい。この二人は、きっと、なかがいいんだなと、そう思った。

「で、私が、『ワルキューレ』のリーダー、篠崎縁です。さっきも自己紹介したと思うけど、改めて、よろしくお願いします。ちなみに字は、『人の縁』の『縁』と書くの」

「ちなみに、縁のことを呼ぶ時は、『お姉様』と呼ぶように」

　絵里さんが、チラッとこちらを見て、そう言った。

「ちょ……やめてよ絵里。それ、ちょっと恥ずかしいんだから」

「皆、そう呼んでるじゃないの。それに、代々続く『ワルキューレ』の伝統でしょう。いい加減、慣れなさい？」

「むぅ……」

　ほおをふくらませるゆかりさん……いや、『お姉様』が、そんな声を出す。でも、ふくれつつも、まんざらでもなさそうな顔をしていたのは、きっと気のせいではないだろう。

「さて……そろそろ着きますよ」

　大通りの広い道を走っていた車は、やがて、せまい道に入っていく。フロントガラスに、とてつもなく高い建物がうつっていた。あれは……もしかして、マンションというやつだろうか？　前に闘悟と、外に出たらどんな所に住みたいか、ということを話していた時に、闘悟がまっ先に「ここがいい！」といっていたやつだ。車は、その建物に入っていく。

　もしここに闘悟がいれば、大喜びしたにちがいない。

　そう言えば、闘悟はどうしたのだろう？　お姉様から話を聞くに、『ワルキューレ』に入る予定のほかの子たちは、全員、それぞれ別々の所にむかわされたらしい。ときおり、木藤さんの所に電話がとどいていた。その会話の内容からさっするに、どうやら皆ぶじらしい。ぼくもふくめて、何人かはケガをしたみたいだけど。

　ちなみに、ケガをした右うでには、ほうたいがグルグルと巻かれている。さいわい、血はもう止まっていた。さっきまでは平気だったけど、今はもう、思い出したくもない。どうやら、平気になったのは、あの時だけみたいだ。多分、世界が赤くそまったときだけ、ぼくは血を見ても平気でいられるらしい。

　病気がなおったわけじゃない。それでも、きょうふをこくふくする方法が分かっただけでも、ぼくは今、すごく晴れやかな気持ちだった。

　車をおりたぼくは、お姉様に手を引かれ、この建物の中に入る。エレベーターで五階まで上がり、連れて行かれるままに、ろうかを歩いた。

「さぁ」

　エレベーターをおりて、ちょっと右に進んだところにある、黒いドアの前で絵里さんがそう言った。にもつは全て持ってこられることになって、もう少しでとどくそうだ。さそわれるままに、中へと入る。

　てっきり、一人だと思っていた。でも、ちがった。

　中に入ったしゅんかん、ぼくはほかにも人がいることに気が付く。その子たちは、それぞれちがった表情で、ぼくを見ていた。おびえたような顔。きょうみ深そうに見つめる顔。うれしそうな顔。でも、その中に、知っている子はいない。ぼくの期待した子は、どこにもいない。

　そこにいたのは、自分と同じくらいのとしの、三人の女の子だった。